

上田トシ氏のアイヌ語散文説話にみる語りの継承と改変 ——大谷洋一氏による公刊資料をもとに——

藤田 護

1. はじめに

上田トシ氏（1912-2005）は、沙流川筋は平取のペナコリに住み、散文説話を得意として伝承活動を精力的に展開した。大谷洋一、安田千夏、平石清隆（平石 2003）、奥田統己（奥田 1990a、1990b）をはじめとする各氏の尽力により、彼女の数多くの語りの記録が我々の下に残されている。上田トシ氏の記録されている散文説話の特徴の一つとして、氏が誰からその話を学んだのかが明らかにされており、またその元の語り手による語りのテキストへもアクセスができるようになっている点が挙げられる。特に散文説話の名手であった姉の木村きみ氏から学んだレパートリーが多いようであるが、同じくらい他の人から話を聞いてそれをレパートリーに加えようとしていた。それらを検討してみると、氏が物語の筋書きを幾つか重要な点で改変していることが明らかになる。本論考は、上田トシ氏が物語を継承しようとする際に、何を改変しているかを明らかにし、そこに一定の傾向が存在するかどうかを考察する。

近年アイヌ語の口承文学のアーカイブ構築が進み、特に道西方言については、アクセスできる物語テキストの数が飛躍的に拡大している。奥田（2017）は、その新しい状況に対応したアイヌ語の口承文学の研究課題を、資料の範囲の限定しがたさと、資料範囲の拡大が可能にする新しい解釈から検討しているが、本稿もその物語テキストへのアクセスの広がった中で可能になった研究を志向している。とともに、アーカイブを中心にアイヌ語話者の声と語りに触れることが中心となる新しい世代の研究において、どこまで語り手一人ひとりの特徴や手触りに近づいていけるのかを模索するものでもある。

アイヌ語が日常的に使用されなくなっていくと、言語や物語の伝承が丸暗記を主体としたものになる傾向があるだろう。しかし、奥田（2017）が言うように、「ごく限られた人数ではあるが、アイヌ語やアイヌ文学を学び自らも語ろうとするアイヌの新しい世代が生まれてきている。これからもさらに新たな語り手が生まれ、これまで記録されてきた物語を自らの語り口で語り直すことや、そうした物語を古典として位置づけたうえで新たな物語——新作アイヌ口頭文芸——を創造して語る可能性も考えられる」のである（同、p.249）。再びアイヌ語を使い、口演しようとしていく次の世代の課題としては、その都度の語りの一回性を回復していく工夫が必要となろう。この研究が、そのような試みのための一助となればよいと思う。

今回は時間の制約から、資料としては、道立アイヌ民族文化研究センターの大谷洋一氏が小川シゲノ氏から上田トシ氏への同じ物語の伝承を記録したもの（大谷 1997、1998、1999）

を用い、そこからどのような傾向が引き出せるかを考察する。次に白老のアイヌ民族博物館が公刊したもの（アイヌ民族博物館 2015a、2015b、2015c、1997）、また平石清隆氏による公刊資料の一部の検討へと進むこととしたい。

2. 大谷洋一氏公刊資料に基づく事例研究

(1) 行者ニンニクの女神と結婚した男（大谷 1997）

(ア) この散文説話では主人公の男性がギョウジャニンニクのカムイである女性と結婚しているのだが、小川シゲノ氏の語りでは物語の出だしで既に主人公が結婚しているが、上田トシ氏の語りでは、最初主人公は一人で暮らしていて、ある日帰ると美しい娘が料理をしていて、そこから一緒に住むようになる。すなわち、上田トシ氏は最初の散文説話としての舞台設定の部分を、より丁寧に、明確にして語っている。

(イ) 小川シゲノ氏の語りではギョウジャニンニクのカムイを妻 (a=maci) とはっきり言っているが、上田トシ氏の語りではギョウジャニンニクのカムイが主人公を養っている (a=e=paroosuke) という言い方しかしていない。ただし、上田トシ氏はギョウジャニンニクのカムイが主人公を好きになった (a=e=kooyoyse) とは言っている。おそらくこの結果として、小川シゲノ氏の語りでは子どもが出来ないことが問題となるが、上田トシ氏の語りではそのような表現がない。またカムイの正体が露見する場面では、小川シゲノ氏はそれが妻であった場合の典型的な表現として「顔色を変えている」(iporo wen kane an) が見られるが、上田トシ氏にはそれがない。この改変がなぜ行われたのかが定かではないが、上田トシ氏のもつカムイと人間の結婚に関する倫理感が、何かしら影響している可能性があるか。

(ウ) 小川シゲノ氏の語りでは主人公は小動物や鹿などをたまに獲っているが、上田トシ氏の語りにはその描写が存在せず、ひたすらギョウジャニンニクのおつゆばかりを飲んでいくことになっていて、彼女が山にも行っていないのになぜかギョウジャニンニクがいつもあることが強調されるようになっている。すなわち、上田トシ氏の語りでは、その状況での特徴的な要素が、より明示化されるようになっている。

(エ) ギョウジャニンニクのカムイの正体が露見した後、小川シゲノ氏の語りでは、カムイはこれから主人公の下に新たな女性に来るからギョウジャニンニクで養えばよいと伝えるのだが、その後の主人公の語りにはそれが現れず、ただカムイの妻に見放されて哀れに死んでいくのだとのみ述べており、ややつじつまが合っていない。これに対し、上田トシ氏の語りでは、カムイの予言通り、別の女性がやってきて主人公を養ってくれて、その女性との間に子どもも設けて死ぬという、オーソドックスな展開となっている。すなわち、上田トシ氏は散文説話の結末の幸せな人生の実現の部分を、より丁寧に、明確にして語っている。

(2) 赤ちゃんを置き忘れて逃げた女（大谷 1997）

(ア) 夫との間に子どもが出来た主人公が、ある日ウバユリ掘りに行きたくなり、子どもを連れて行き、いい気分で歌っていると熊が聞いていたことに気づいて、主人公が子どもを放って逃げてしまう。この際の主人公と熊とのコミュニケーションに重要な違いがある。小川シゲノ氏の語りでは、最初の熊との出会いの場面で、既に熊が手を叩いていることを主人公は見て取っている。これに対し、上田トシ氏の語りでは、主人公は最初の出会いの場面で、熊が何をしようとしたのかは全く読み取れず、後の夫に対する熊のカムイの（夢の中での）弁明を通じて初めて状況を理解する。すなわち、上田トシ氏の語りの方では、人間とカムイの間の意思疎通の困難が、いっそう強調されている。

(イ) 夫はカムイたちに危急を知らせ、悪い熊がいるならば罰するようにと依頼をする。夜が明けて夫と私が二人で山に行くと、例の熊が赤ちゃんの上に覆いかぶさっていて、夫は弓矢で熊を倒すと、赤ちゃんは無事であって、夫は熊に礼拝をする。この際に、小川シゲノ氏の語りでは、先に村を挙げた熊の送り儀礼をし、夢では熊がそれに対する感謝をしに出てきて、夫を大いに褒める。熊は両親には叱られているが、人間への感謝が前面に出している。これに対し、上田トシ氏の語りでは、夫は熊にその場で拝礼（onkami）はしているが、盛大な送り儀礼はしていない。夫はカムイたちに抗議をし、熊のカムイはカムイたちから叱られている。すなわち、ここでも上田トシ氏の語りでは人間とカムイとの間に一定の距離が置かれている。

(ウ) 上田トシ氏の語りでは、出産後に主人公が山に出かけたくなるのも、歌を歌いたくなるのも、それまでやっていなかったのに急にやりたくなるという点が強調されており、これはカムイが人間を操っているときの典型的な現象ではないかと思われる。だとすると、熊のカムイがこの女性に惚れて、操ろうとしたという筋が、上田トシ氏の語りでは少しずつ導入されつつあったのではないかと推察できる。熊と遭遇してうっかり子どもを置いて逃げてしまったというのは、より具体的な出来事に近い位相での物語であるが、カムイが人間に恋をして、人間とカムイの結婚が不成立に終わるという物語は、依り方としての成立の度合いが高いとも考えられ、そのような型のある話へと向かおうとしたのであろうか。

(3) 便所にお椀を入れられたニシパの命を救った女の話（大谷 1998）

(ア) 石狩川中流に住む女性主人公の両親について、小川シゲノ氏の語りでは、父親がまたとない狩り上手として紹介される。悪い妻が便所に夫（石狩川河口の若い長者）のお椀を入れて夫を殺そうとした企みが、それについて檜と柳が会話するのを耳にした主人公の働きで暴かれた後は、その若い長者から結婚を求められると、年老いた両親の世話が気がかりからということで、両親ともども石狩川河口の村に移り、面倒をみることになる。このように、両親が貧しいという設定ではないのだが、ただし主人公が石狩川河口の若い長者の家に赴いた際には、その家の悪い妻から「貧しい女（wen menoko）」と罵られている。これに対

し、上田トシ氏の語りでは、両親が貧しく、主人公の女性が採ってきた山菜や野草の混ぜ煮（*kina rataskep mun rataskep*）中心の食事をしており、問題が解決した後に主人公が求婚された際にも、主人公の父親が貧乏人だから娘を嫁にやるのも気の毒だし、娘がいないと自分たちが養ってもらえないということを相手に述べたうえで、相手から両親ともども面倒を見ると言われることになる。すなわち、上田トシ氏の語りの方では、貧富の差がより明確に設定されている。

（イ）主人公が石狩川河口の若い長者の家で神懸かり状態になって問題を露見させた後に、小川シゲノ氏の語りでは、その悪い妻が自分の布団を背負って出て行ってしまったという噂を主人公が耳にするが、上田トシ氏の語りでは、悪い妻がどうなったのかという点に関する説明が一切ない。この改変の理由は定かではないが、上田トシ氏が（3）の点を明確にしようとした際に、この若い妻の方の話をうっかり入れ忘れたという可能性があるだろうか。

（ウ）主人公が問題を露見させた際に、小川シゲノ氏の語りでは、若い長者の両親は明示的には出て来ずに、その場の人たちがお椀を洗ったり、イナウを付けたりし、若い長者に水を飲ませたりしていて、また問題解決後は若い長者自身が主人公に対して求婚をしに来る。これに対し、上田トシ氏の語りでは、家族の者たち（*cise kor utar*）や家の婦人（*cise kor katkemat*）がこの作業をしており、また主人公への求婚にも息子だけでなく父親も同行してくる。すなわち、上田トシ氏の語りの方が、石狩川河口の若い長者の家族の設定を丁寧に行い、その後の物語の展開においても、そのつじつまを合わせようとしている。

（4）ソロマのウエペケレ（大谷 1999）

子のいなかった裕福な夫婦の下に子が生まれ、女性の主人公（妻）が子どもを連れて河原に出かけている際に、幾つもの色のもやが河口から上ってくるのを見て、ソロマ（コゴミ）と名付けたこの名前を呼んで家に帰る。火のカムイを介して夫が夢を見たところでは、流行り病のカムイ（*payoka kamuy*）が村に害を及ぼそうとしていたのだが、最も嫌なものであるソロマの名前を主人公の女性が口にしたので、危害を加えずに帰ることにした。ここまでの物語の筋に小川シゲノ氏の語りと上田トシ氏の語りの間に大きな違いはない。

違いがあるのは、流行り病のカムイが主人公夫妻に対し種明かしをした後で、小川シゲノ氏の語りでは、コゴミをはじめとして山菜を干したものを流行り病のカムイに送り、来るなとカムイに伝えることになっているのに対し、上田トシ氏の語りでは、山菜とタバコと精白した穀物などを食料として送ることになっている。また上田トシ氏の語りでは、もともと人数の少ない村であったが、流行り病のカムイが来なくなって村が大きくなったという説明が後ろに付け加わるが、小川シゲノ氏の語りにはそれがない。

3. まとめ

大谷洋一氏の一連の取り組みにおいては、小川シゲノ氏は物語を多く知っているがアイヌ語で通して語ることは難しいため（大谷 1997、p.77）、上田トシ氏に聞かせて語ってもらうことで、アイヌ語の語りとしてどのように形成されるかを明らかにしようとした試みである。

小川シゲノ氏の語りの方が粗く、上田トシ氏の語りの方が丁寧な印象を受けるが、これはどちらが良いということではないのではないかもしれない。すなわち、十分なアイヌの物語世界の教養をもった話し手と聞き手との間では、粗い形でも散文説話の骨格は十分に伝わるであろうし、物語の細部は受け取った人がまた自由に設定すれば良いのであろう。また、小川シゲノ氏は「ソロマのウエペケレ」に関しては、設定を含めかなり丁寧に語っており、アイヌ語で通して語るができないから物語内容が粗くなるということでもなさそうである。

これは、散文説話において、物語の骨格が伝承されれば、主人公の身の上や家族構成、村の社会のあり方は、それぞれの話者がある程度まで自由に設定することができるということなのかもしれない。この設定の差異は、物語のつじつまを細部で合わせようとする、その展開にも一定の影響を及ぼすであろう。

また、小川シゲノ氏と上田トシ氏で、人間とカムイとの関係において人間がどのような対応をするかについて、差異がある点も注目される。赤ちゃんを暫定的に奪った熊に対してどのように対応するか、そして流行り病のカムイに対してどのように対応するかについて、踏まえられている共通の理解の土台は存在するが、力点の置き方にやや違いが見受けられる。人間とカムイの関係に関して語り手ごとの観方があるとすれば、これは興味深い。

特に、「赤ちゃんを置き忘れて逃げた女」について、上田トシ氏の語りにおいては、この人間の世界（aynu mosir）におけるカムイと人間のコミュニケーションの断絶が、より強調される。人間はカムイの意図を、夢の中での＜人対人＞としてのコミュニケーションを通じて初めて理解する。このコミュニケーション観に基づいて、熊のカムイへの扱いが、小川シゲノ氏が語るような客人として迎える丁重な送り儀礼から、簡素な礼拝と抗議、そして夢を通じた熊からの謝罪へと大きく転換していると言えるであろう。すなわち、これは上田トシ氏が、伝承した物語について、自らの世界観に基づき散文説話としての物語の筋を通そうとした結果、新しい説明図式への変化の萌芽が見受けられるということなのではないだろうか。

参考文献

- アイヌ民族博物館『上田トシの民話1』アイヌ民族博物館、2015a 年。
アイヌ民族博物館『上田トシの民話2』アイヌ民族博物館、2015b 年。
アイヌ民族博物館『上田トシの民話3』アイヌ民族博物館、2015c 年。
アイヌ民族博物館『上田トシのウエペケレ』アイヌ民族博物館、1997 年。

大谷洋一「小川シゲノから上田トシへの伝承3」『北海道立アイヌ民族文化研究センター研究紀要』第5号、1999年、pp.85-113。

大谷洋一「小川シゲノから上田トシへの伝承2」『北海道立アイヌ民族文化研究センター研究紀要』第4号、1998年、pp.29-68。

大谷洋一「小川シゲノから上田トシへの伝承」『北海道立アイヌ民族文化研究センター研究紀要』第3号、1997年、pp.77-119。

奥田統己「アイヌ口頭文芸研究の課題」日本口承文芸学会編『こえのことばの現在—口承文芸の歩みと展望』三弥井書店、2017年、pp.247-261。

奥田統己「アイヌ口誦文芸（2）—上田トシさん口演「犬の子供をみごもった女の物語」」『札幌学院大学人文学会紀要』第48号、1990b年、pp.269-281。

奥田統己「アイヌ口誦文芸（1）—上田トシさん口演「カラスに育てられた男の物語」」『札幌学院大学人文学会紀要』第47号、1990a年、pp.169-200。

平石清隆『沙流地方のウエペケレー—上田トシの伝承』株式会社桜プリント、2003年。

（ふじた まもる・慶應義塾大学湘南藤沢キャンパス環境情報学部）